

上原専祿「主体性形成」論における「個」観念 「共同体」相対化と「近代」相対化の相

片岡弘勝

奈良教育大学学校教育講座(教育学)

(平成21年5月7日受理)

The Japanese Individuality Image of UEHARA-Senroku's Theory of Subject-formation : Focussing on the Phase of Checking "Old Community" and "Modernity" Relatively

KATAOKA Hirokatsu

(Department of School Education, Nara University of Education, Nara 630-8528, Japan)

(Received May 7, 2009)

Abstract

The purpose of this article is to clarify the Japanese individuality image observed in UEHARA-Senroku's theory of subject-formation.

UEHARA proposed following five theses relating to the Japanese individuality image.

1. "world", "Japan" and "self" as new objects of historical consideration (1946)
2. educating Japanese children to "modern individual", "one of national peoples that is opened to another nation" and "one of human beings" (1951)
3. the method to recognize modern society by skewering realities of "world", "Japan" and "community" (1960)
4. "world historical images" on "individual", "community", "nation", "region" and "global world" as five items of historical spaces (1968)
5. "the living person as media of the dead person" (1974)

In 1970's, UEHARA's "world historical images" had more complex characteristics that were organized by various communities. The structure of this images looks like a mandala pattern. Then UEHARA's individuality image is the person who continuously faces his own death.

UEHARA designed the individuality image that was liberated from restrictions of the feudal community. He considered the possibility of their liberation on the condition that this person checked the feudal community and modern system relatively.

UEHARA's theory of subject-formation, as mentioned above, was originated from his radical criticism to existing religions. Then, UEHARA paid attention to the possibility of finding out person's abilities that was preserved in the form of religion, by criticizing religions.

Key Words : subject-formation,
the individuality image,
"community" concept,
UEHARA Senroku

キーワード : 主体性形成、
「個」観念、
「地域」概念、
上原専祿

1. はじめに 課題の限定

日本の各地域社会において「自立」(「一人前」)とは、これまでどのようにとらえられてきたのであろうか。今日はどうであろうか。この問いは、教育の実践・理論にとって不可避の根源的課題とつながっている。しかし、この問いに応答するためには、欧米社会における「近代人」像を相対化し、日本の「共同体」と「共同性」の特徴と変容、そしてその残滓を世界史的視野の下に把握し、その問題と可能性を探り、その上で日本社会における「自立」を模索しつつ人間形成のあり方を追求しなくてはならない。

この問題を社会教育研究及び「地域と教育」研究にひきつけた場合、少なくとも教育実践の過程の中で内発的な自己教育の主体が形成される相を特定し、その条件と可能性に光をあてる理論的作業が要請される。その作業では、当該の主体がイメージした具体的な「地域」の生活現実と人間形成能力との関連で、前記した教育的価値が分析されることになる。

以上のすべての諸課題を包括する形で分析する理論枠組みを提出した数少ない人物の一人が、上原専祿(1899 - 1975年)である。なかでも上原は、欧米「近代」の相対化を一貫して追究しながら、内発的なエネルギーを動因とする「主体性の形成」と、「中央」勢力圏に対する自立性・自律性を備えた「地域」との運動力学を最初に提起した。

筆者は、これまで上原理論の鍵概念のいくつかを分析し、さらにそれらを上原の行動と思想の変容過程に即して考察してきた。最近では、2006年9月の日本社会教育学会第53回研究大会では、「地域」概念の動態性と変容について分析し、戦後教育本質論に位置づける問題提起を試みた⁽¹⁾。翌年9月の第54回研究大会では、大塚久雄の「共同体」概念及びR.M.マッキーヴァーの「コミュニティ」概念との比較考察により、上原「地域」概念の特徴を明らかにし、そのモデル化を試みた。その際、「地域」モデルの構成要素として、「自然村的秩序」のもつ内発的エネルギーの存在と再生産、「中央」勢力圏に対する経済・政治・文化の自立志向、生活・生産圏の異心円的複合構造 曼荼羅的世界観、個人志向と集団志向との動態性を生み出す緊張力学という4点を提起した⁽²⁾。

これらの研究では、最重要の鍵概念である「地域」に関する上原言説情報を集約し、固有の特徴と構造に関する解明を試みた一方、その「地域」で生活・生産する人間個人の意識変革の相を考察する課題が残されることになった。このため、本稿では、冒頭の課題意識に立って、「地域」との関係構造に即して、上原理論における「個」観念の解明に迫ることとする。

このテーマを追究する際、上原理論の基軸が「近代」相対化であるため、必然的にその「個」観念についても欧米「近代人」像との相違点が焦点となる。このため、封建遺制及びそれを正当化する宗教知、さらには欧米「近代」相対化作業を不問にした「科学の体系知」権威からの「個」の解放を議論の俎上にとりあげることになる。上原の「個」観は、こうした文脈と関わって日本社会的な「地域」概念との関係性の中でとらえる必要がある。このため、以下、両者の関係構造を「地域 個」と表現する。

本稿では、上原「地域 個」観に関わる言説と変容を跡づけ、その発想論理を上原晩年の思想到達の見地から再構成する。その際、筆者(片岡)が2005年に試みた全生涯にわたる時期区分及び、2006年に試みた「価値づけ」論の時期区分を参照しながら論を進めることにする。それらは、次のとおりである。

A 上原専祿の全生涯の行動・思想に関する時期区分とその指標⁽³⁾

- 第1期 思想形成期(1)(1899.5~1915.3)
出生から松山中学校卒業まで
- 第2期 思想形成期(2)(1915.4~1926.3)
東京高等商業学校入学からウィーン大学留学後帰国まで
- 第3期 教員生活開始から「抵抗としての読書」期
(1926.4~1945.8) 高岡高等商業学校勤務から東京商科大学附属商学専門部勤務(後、本科講師兼任) 敗戦まで
- 第4期 「教職エリート」として大学改革関与期
(1946.8~1949.1) 東京産業大学(後の一橋大学)学長、大学基準協会役員、大学設置委員会委員
- 第5期 「教師大衆」として大学教育実践及び教育論、「国民文化」論、「民族の独立」論の時期
(1949.1~1957.7)
- 第6期 国民教育研究所における「国民教育」研究期
(1957.7~1964.5)
- 第7期 「庶民大衆」として「世界史像」研究期
(1964.5~1969.4)
- 第8期 「死者のメディア」として「世界史像」研究期
(1969.4~1975.10)

B 「形成」過程への上原専祿の価値づけ方法の変容に関する時期区分とその指標⁽⁴⁾ (括弧内は、前掲した全生涯にわたる時期区分の各期)

- ・前期「近代」に対する対抗的価値の模索と対置
<抽象的肯定>系の価値づけ

(第1期～第7期)

- 1 模索期(第1期～第3期)
- 2 「新なる性格の国民の形成」の提唱
(第4期～第5期)
- 3 「民族の独立を凝集点とした国民形成の教育」
の対置(第6期のうち1961年まで)
- 4 「価値概念としての地域」の発見と「世界史像」
の追求(1962年～第7期)

・後期「近代」の内部矛盾からの価値の発見
＜具体的否定＞系の価値づけ(第8期)

また、前記した「近代」相対化、「死者・生者」関係
(「死者のメディア」)論、「世界史像」等については、
筆者(片岡)のこれまでの上原研究の中で重視してきた
鍵概念である。このため、本稿で「個」観念を分析して
いく中でも必要に応じて言及せざるをえないことを予め
記しておきたい。ただし、その都度、典拠を明示する。

なお、本研究は、冒頭の課題意識に立って、上原理論
を構成する諸契機とその論点の相互連関をおさえた上で
同理論の基本的骨格・枠組みを明らかにする理論作業及
び、このことを通して戦後日本の「学問の生活化」論の
系譜から未発の積極的契機を探り出す基礎作業の一環で
ある。なかでも本稿で取り組む日本社会における「個」
観念の究明は、冒頭で既述した日本社会における「自立」
(「一人前」)を模索する上での基礎作業としての意義を
もつ、と筆者(片岡)は考えている。

2. 上原専祿における「地域 個」観の変容 時期区分に即して

ここでは、まず、「地域 個」観に関わる上原言説の
変容を時間軸にそって確かめる。その際、「はじめに」で
既述した時期区分に即してその上原「地域 個」観の変
容を跡づけることにする。

2.1 「歴史的省察の新対象」としての「世界」「日本」 及び「自己」(1946年・第4期)

第二次世界大戦の敗戦と連合国軍による日本占領とい
う歴史的現実の「密度と迫力」に直面した上原は、その
事態の本質を理解するため、「世界」「日本」及び「自
己」の三者について改めて「歴史的省察」を加えた。そ
の著作が『歴史的省察の新対象』(弘文堂書房、1948年)
である。上原は、この点について次のように回顧してい
る。

「私は一方では行動の場としての『新しい世界』と『新
しい日本』との歴史的あり方について認識しようとし、
他方では、行動の主体としての『新しい自己』の歴史的

なあり方について自己認識をもとうとした」⁽⁵⁾

その「省察」は、敗戦と被占領という、「世界におけ
る新現実の発生とその性格、その現実の密度と迫力」を
実感した上原が、その事態そのものとその歴史的由来と
理由とを歴史的に追求するための対象、視点および方法
を考察したものであった。その「対象」は、政治事実の
みならず、「ヨーロッパに源流を發すると考えられると
ころの人間・人格・生活意識の世界的浸透の問題」と、
「その浸透迫力の前に立つにいたった「日本」の「自己」
の精神構造」(「思考と批判との彼岸に止せんと願し
ていた自己より、歴史的省察によって自らを保持せんと
つとむる自己への推移」)も含まれていた⁽⁶⁾。

ここでは、第二次世界大戦後、上原の「個」観念の再
出発が、引用したように欧米社会の「人間・人格・生活
意識の世界的浸透」に直面して再形成されたことを確か
めておきたい。その理由は、上原の「主体性」の内面構
造に大きな衝撃をもたらし、それ故に新たな形の「近代」
相対化の出発であったからである。

2.2 「近代人」「民族の一員」「人類の一員」に 育てるということ」(1951年・第5期)

被占領下に推し進められた「新教育」には、「歴史的
社会的問題意識」が欠如していると、その一般性、抽象
性を批判していた上原は、1951年から翌年にかけて教育
学者・宗像誠也と教育対談を行い、「新しい日本人の形
成」について語った。その上原発言の要点の一つは、「日
本人の一人々々を、「近代人」「民族の一員」「人類の一
員」にまで教育する」しかもその教育は同時に行われる
べきという点にあった。

この点について上原は、次のように語った。

「ヨーロッパと日本の比較を、教育の課題にかかわら
しめて考えてみると、第一には、日本人の一人々々を近
代人にまで教育すること、こういう課題が自然にそこら
から出てくるのではないかと思うのであります。それから
第二には、政治的、倫理的な視点から考えると、日本人
の一人々々を民族の一員にまで教育するという課題が出
てくると思う。そして第三には、現在の世界の事情と日
本のその中における地位という点から、日本人の一人
々々を人類の一員にまで教育するという課題があると思
います。この三つの課題がこれからの教育の基本的課
題であり、しかもその三つが同時に果たさなければなら
ないものとして私には考えられる。」⁽⁷⁾

「日本人が近代人の一員としてめいめいに自覚する、
民族の一員として自覚するということは、自分を人類の
一員として日本人が自覚するとき同時におこなわれるの
で、これが段階を追うていくのではないと思います。そ
こに問題のむずかしさがあるわけです。けれどもそのよ
うな場合に、三方面の自覚が同時におこなわれてこそ、

リアルな実現の可能性のある問題にもなってくるというふうに考えます」⁽⁸⁾

「三つが同時に果たさなければならない」という発言と関わる点で注意されるべきことは、上原の主張する「民族」とは、ヨーロッパ諸民族の特徴を指摘しながら、「独立の人格としての個我の有機的な結合」という「近代の意味における民族意識の構造」に注目している点、ゆえに「個我意識」が前提されている点、「民族の政治的形体としての国家」と区別している点⁽⁹⁾である。

また、同対談においては、以上のように欧米社会で生まれた「近代精神」を消化することが一定程度、重視されていた。しかし、1.1で既述した「個」観との接続関係に即していえば、それまでに保持されていた「近代ヨーロッパに対する主体性」は消失せず、確かに維持されていたことに注目しておきたい⁽¹⁰⁾。

2.3. 「世界と日本と地域の現実を串刺しにして把握する」認識方法(1960年・第6期)

その後、上原の「個」観が別の角度から表現されたものが標記である。

この認識方法は、第6期、国民教育研究所における共同研究の中で上原が提起したものである。この提起は、「世界」、「日本」及び「地域」に現象している諸々の歴史的現実を三つの相に共通する認識軸を持ってとらえようとする方法である。たとえば、次のような上原の発言がみられる。

「[中略]どのような小さな研究集団、部落の教育・サークルをとっても、全地域の、全日本的な問題が、全世界的な問題というものを集約したような形で、そこにあらわれている。世界の問題というものは複雑で自明では決していない。それが日本の問題となり地域やサークルで問題にされていくしかたも複雑なものである。しかしまた、非常に基本的な問題に還元することも必ずしも不可能でない。しかも簡単に還元してしまうと問題の具体性が失われる。そうであればあるほど、世界と日本と地域の現実を串刺しにする把握をしなければならない」⁽¹¹⁾

この発想には、問題認識の共通性、普遍性を追求する志向性と、随伴する問題理解の抽象化を避け、具体性を追求する志向性が、緊張感をもって設定されている。その際、「地域」、「日本」及び「世界」の各々三者が、容易には他者に還元、吸収され得ない「個性的存在」としてとらえられている⁽¹²⁾。

なお、その際の認識主体としての「自己」あるいは「個」は、その前提とされている。

ここで注目すべきことは、「個」観の表現に関わって、初めて「地域」の語が用いられたことである。以後、「個」観の表現に関わって一貫して「地域」概念が用いられていった。

2.4. 「歴史的空間の五項」としての「個人・地域・国・地域世界・全地球的世界の動的、構造的、具体的な歴史像」=「世界史像」(1968年・第7期) 曼荼羅的=異心円の構造

上原の生涯では、一貫して自ら独自の「世界史像」の創造に取り組むというテーマが保持されていた。1964年5月以後、あらゆる組織・団体から離れて「庶民大衆」という自己認識の中で「単独思考」により「世界史像」創造に取り組んでいた上原が、1968年時点で構想していた「世界史像」創造の方法が、次にとりあげる「曼荼羅的世界史像」である。

上原は、「a 生存の問題(平和と安全確保の問題)、b 生活の問題(貧乏追放の問題)、c 自由と平等の問題(圧制と差別克服の問題)、d 進歩と繁栄の問題(忍従と停滞打破の問題)、e 独立の問題(民族の主体性回復の問題)」という「日本の大衆が体験的につかみとった主要な問題諸系列」を「十分動的に、十分構造的に、十分具体的に認識するためには、問題の担い手そのものをも問題化し、対象化してゆかねばならないと同様に、[中略]問題が生起し、展開し、解決されてゆく歴史的空間をも問題化し、対象化してゆく必要がある」と考えて、「a 個人、b 地域、c 国、d 地域世界、e 全地球世界」という五項をあげ、その上で、これら複数の項間に浸透する問題を含めて複合的な構造的認識方法への志向性を語っていた⁽¹³⁾。

その異心円の複合的世界(史)観は、曼荼羅の世界観との重なりも看取される。そこでは、とくに「地域」が「a 個人」と、「c 国」、「d 地域世界」、「e 全地球世界」との間をつなげる上で動的な要素となっている⁽¹⁴⁾ことがとくに注目される。

2.5. 「死者のメディアとしての生者」(1970年・第8期)

1969年4月、妻・利子氏が死去した。このことを境にして、上原の行動・思想は大きく変容していった。上原は妻の死を「生命の蔑視」による「被殺」として受けとめた。以後、上原は、「亡妻との回向」の生活、すなわち、自らの主観の中に「死者として実存する妻」の無念の想いに対して不断に問いかけ、そこから得られると想定した死者のメッセージを受けとめ、「死者のメディア」となって現世の実社会の中で行動に移していく生活を展開していったのである。

こうした「死者・生者」論に立つ「回向」実践について少し追記すると、それは、無念の死を遂げた「死者」がどのような心持ちであり、どのような意志や希望を持つてであろうかについて、残された「生者」がその主観の中で反芻し、それと対話し、そこから得られた価値観や知見を「死者のメディア」という自己像を持って自らの

指針（主体性）として内化し、現代社会で実現させていく行為である。この実践は、このように世俗社会における認識・行動論理として理解する必要がある。こうした取り組みによって「生者」が生きる指針を獲得する筋道は、「死者・生者」関係的主体性論と表現することができる⁽¹⁵⁾。

第8期の「死者・生者」関係論構造については、注(3)論文をはじめこれまで筆者は繰り返し論じてきた。本稿の焦点である「個」観念に関わっても同様に重要であるため、再言及した。その理由は、「3」及び「4」で後述するように、第8期の上原にあって、欧米社会における一神教の精神構造を前提した「個」観の相対化が明瞭になったからである。本稿の焦点はこの点に深く関わっている。

3. 「死者・生者」論における「地域 個」観到達した理論の再構成

3では、上原が最終的に到達した第8期の「死者・生者」論の見地からみて、「2」でみた第7期までの諸理論・提起の構造のうち、何が継承され、何がどのように変容して第8期の理論に接合されていったかについて整理し、第8期の「主体性形成」論における「地域 個」観の再構成を試みる。

3.1. 「個人・地域・国・地域世界・全地球的世界の動態的、構造的、具体的な世界史像」の認識軸

上原が第8期にとりくんだ著作をみた場合、「庶民大衆」各自による、標記の異心円の「世界史像」の認識と描出という課題は最後まで一貫されていた。「地域」が最重要概念であることも同様である。

しかし、標記の認識とも重なる部分をもつ、「2.3」でとりあげた認識方法の中の「串刺し把握」という表現は筆者管見の限り、第8期にはみられない。この認識方法に込められた「世界」、「日本」及び「地域」に共通する諸事象とそこに貫通する本質をみきわめようとする発想は維持されていたが、「串刺し」というイメージが晩年の上原にどのようにとらえられていたかの判断は大変難しい。

むしろ、明瞭であることは、第7期そして第8期に至って、異心円（＝曼荼羅）的な、諸「地域」の複合的構造のイメージが濃厚になっていった点である。上原にあっては、法華経的世界観と新約聖書的世界観との間を往還する思惟（「近代ヨーロッパ」精神への肉薄と相対化のたたかい⁽¹⁶⁾）が一大特徴であり、それは第5期の「串刺し把握」の提起時も同様である。当時、すでに「個人」を起点とし日本、世界へと視野を広げる同心円の拡大発想（欧米世界観）が相対化されていたことについては、

筆者は別稿⁽¹⁷⁾で繰り返し指摘した。しかし、第8期に至っては、異心円（＝曼荼羅）的な、諸「地域」の複合的構造のイメージが一層濃厚になった。それは、上原の認識方法の別表現である「生活現実の歴史的認識」方法の深化に帰因する。

「生活現実の歴史的認識」は1963年に提起された⁽¹⁸⁾ものであるが、その「歴史化」の含意が第8期に至って（第5期にその兆しはみられるが）「地域」における「死者」（「近代」の犠牲者）との対話、その「被殺」の要因・責任の追求を起点としてイメージされるようになった⁽¹⁹⁾。

この時点で、認識の起点である価値づけ（認識主体にとっての価値観の選択・設定）が、一神教の神観念（神と個との対話）のイメージから決別し、「生者」の主観内における「審判者である死者」⁽²⁰⁾との対話から生み出されるものとして了解されるようになったといえることができる。したがって、こうした価値観に基づく認識軸（複数）を「串」に見立てて、「地域」、「国」、「地域世界」及び「全地球的世界」に通底する問題本質を見極める発想となったのかもしれない。

その際、「日本社会においてはすべての人間はいつでも殺される危険と殺す危険の、双方の危険の下に生存しているという洞察」、「死に接しつつ生きる人間」⁽²¹⁾という極限的な「地域 個」観が想定されていた。

3.2. 「共同体」相対化の循環

「2」でみた五つの言説は、上原「地域」概念がどのような意味と論理をともなって「共同体」を相対化したものなのか、その「地域」は、どのような構造をともなって「民族」や「人類（普遍）」につながっているものなのか、という観点からも再整理される必要がある。その理由は、この点が明瞭になってはじめて、3.1.の「複合的世界史像」の論法を了解することができるからである。

上原の「生活現実の歴史的認識」論では、当該「地域」に伝承・蓄積されてきた宗教的信条に立つ自然観・社会規範、エートス自体を全否定しない。むしろ、それらは、当該「庶民大衆」の自意識・自己認識を起点とする認識を重視する観点から尊重される側面をもつ⁽²²⁾。ところが、上原理論は封建的な強制的拘束力をもつ「共同体」とそれを正当化する因習・教義からの脱却を明らかに志向していた。それでは、上原はどのような発想と論理を備えて「共同体」を相対化し、代わって「地域」を創造しようとしたのであろうか。この点を「個」の意識変革の側面から再考してみたい。

第8期の「死者のメディア」論は、根源的な意味では、一人ひとりの「死者」と「生者」との関係性を基盤として構想され、その時間的空間的な累積の結果、「地域」

における複数の「死者」たちがとりあげられ、問題構造と必要に即してそれらが共有される。「生者」は、その「死者の想念・言葉」に照らして既成の宗教的信条に立つ自然観・社会規範、エトスを反省的にとらえ直す実践を行う。その際、新植民地主義政策を含む「近代」システムの犠牲となった「死者の言葉」に照らして、「近代」自体が、また、その犠牲を阻止できなかった既成の「共同体」が相対化され、反省されることによって、同じ犠牲が再来する可能性を消し去る実践が予定されることになる。この過程には、「近代」の矛盾（「死者」の言葉）の価値観に照らして、「共同体」とそれを正当化する因習・教義が検証され、変革され、新たな「地域エトス」が形成され、そのエトスの懐の中から新世代の「個」が成長するという循環が含まれることになる。また、同時に「近代」システムを無批判に信仰する場合の「近代的（体制）知」が検証される過程も含まれている。

第8期の「地域 個」観には、こうした一人ひとりの「死者」との世俗的対話の回路から導かれる価値観に立って、「共同体」相対化の循環構造が構想され、その彼方に、不断に変革される「地域共同性」が展望された。

3.3. 個人志向と集団志向との動態性を生み出す緊張力学

3.2. でみた「共同体」相対化の循環は、既成の集団秩序を「個」の側から検証する過程である。その過程には、「地域」内における個人志向（「個」の主張）と、集団志向（「地域共同性」の秩序形成）が同時に進行することが想定されている。

この同時進行を起動し、展開させていく動力ともいえるものは、上原理論特有の個人志向と集団志向との動態性を生み出す緊張力学である。この力学については、別稿⁽²³⁾で指摘した。その要点は、個人的見地と社会（集団）的見地とを予定調和的に構想するのではなく、むしろ、これら両極の対立・葛藤を前提し各々の志向性を徹底させることによって動態性（ダイナミクス）を生み出す力学である点である。この力学は、第8期の「死者・生者」論によって一層強化された。「近代」システムによる「被殺」という、個にとっては極限状況からの省察・検証の含意が加わったからである。

こうした力学は、「地域」概念に組み込まれているのみならず、3.1. でみた他「項」（「国・全地球的世界」）にも組み込まれている。このため、3.1. でみた「個人・地域・国・地域世界・全地球的世界の動態的、構造的、具体的な世界史像」創造の営みにおいて、これらすべての「五項目」の局面で、緊張力学による動態性（ダイナミクス）が現れることになる。いずれの「項目」局面の存在を認定する際にも一局に固定化されない複合的かつ重層的な存在構造（いわば「越境的存在」）であって、

はじめて「リアルでアクチュアルな」存在認識をもたらすと構想されたのである。ただし、「五項目」の中で最も動的要素が強いものが「地域」である。

4. 宗教批判論における「個」再考 「共同体」の三重否定による権威からの解放

「3」で述べた「地域 個」観は、「個人・地域・国・地域世界・全地球的世界の動態的、構造的、具体的な世界史像」の枠内で、その最大の動的要素である「地域」との関係で「個」がどのように存在するのか、という視角から考えたものである。

こうして記述すれば、改めて「個」に即してみた場合、どのような「個」イメージが想定されているのか、なかでも上原の「個」はどのような意味と論理で「共同体」から離陸（＝意識変革）したものと見えるのか、が問われることになる。「4」では、この論点に焦点をあてて考察することにする。

4.1. 「共同体」相対化と「近代」相対化の往還

上原の全生涯は「近代」相対化のたたかいであった。1923年～1925年のウィーン大学留学中、ヨーロッパの学問・文化に肉薄してそれを吸収すると同時に対決した経験をもつ上原は、その行動が示すとおり、思想形成の頃から、明らかに「近代ヨーロッパ」の文化への主体性を志向していた。

ところが、第二次世界大戦敗戦と被占領を体験した直後、「2」でみたように欧米諸国の政治・経済・文化力の背景にある人間精神の「近代性」に再着目し、一定程度それに傾斜する時期（第4期）があった。その際にも、旧来から維持していた「主体性」とそれを基盤にした「近代」相対化志向が秘められていたこと⁽²⁴⁾は重要である。他方で、一貫した姿勢は、日本の古い「共同体」的拘束・規制やそれらを正当化する因習・教義に対する強烈な批判志向である。

その後、アジア・アフリカの諸民族独立の動向を現実的基盤として、上原の「世界」観念が「欧米」への一定の傾斜（第4期）から「アジア・アフリカ」の可能性を重視したもの（第5期以後）⁽²⁵⁾へと変容していった。それは欧米諸国勢力による植民地主義政策及び新植民地主義政策への批判を強めていく時期と重なる。

このように、上原の戦後は、「共同体」を相対化する行動・思想と、「近代」を相対化する行動・思想を往還させながら、「主体性」を追求した時期であった。しかも、こうした「往還しながらの主体性」が明瞭に浮き彫りになったものが、第8期の「死者のメディア」として「死者」と対話することによって生まれる「個」（「生者」）の「主体性」である。

こうした「往還する主体性」は、「共同体」の否定(=第2期～第4期の「近代ヨーロッパ」の学問・文化の(批判的)吸収の側面)を介した、更なる否定(第5期以後の「民族の独立」)へと展開されていった。さらには、第8期には、既述したような「死に接しつつ生きる人間」という「死者・生者」関係的主体性論から、第5期～第7期までの自らの言説の一般性・観念性を批判する境地にも到達したのである。上原は、1945年敗戦時に自らが意識化した、「戦争」にかかわる「死と生」とその責任に対する根源的な省察(=「歴史的認識」)を第8期に行うことになったといえることができるかもしれない。

いずれにしろ、上原理論における「個」は、既述したような「三重の否定」を介して、古い「共同体」残滓からの離陸を果たしていった、と考えられる。

4.2 「地域」及び「民族」との関係上での「個」の存在(実感)

4.1.で既述したような「個」観念は、「個」の内発的な契機からのみによって変革されていくものではない。欧米社会から生み出されたといわれる「近代的個」は、唯一絶対の創造神信仰を基盤とする世界観の中で「神」との対話を軸として「個」の構造が規定されていたと語られることがある⁽²⁶⁾。

上原理論の場合、聖書との対話は法華経との対話と同様に、常時なされていたが、前記したような(近代的)個からのみの内発的な契機によって変革されていく発想は、第2期(ウィーン大学留学)という早い時期から否定されていた。

「2」及び「3」で既述したことに基づくならば、上原は、「地域」、「民族」、「国」あるいは「全地球的世界」という局(「項目」との関係)を結び中で、「個」の意識変革が図られていく過程が想定されている。

こうした関係性について言及する以上、個別的存在としての「個」にとっての外界からの刺激・作用のみならず、「個」の内面事情についてもふれることが必要になる。その際、改めて注目される上原発言に、第4期の「個体生命の価値」への関心がある。それは、敗戦と被占領という状況下、次のように発問された。

「しかしながら、一に、現在の政治事情と社会状況の下では、個体生命はあくまで受動的地位を占めうるに過ぎないものなのだろうか。即ち個体生命は、その様態と運命との一切を挙げて、国家の命運や階級の進退によって左右されるのほかにないものであり、逆に国家的全体や階級的総体の進退に対して能動的な作用を及ぼしえぬほどに微弱なものであるか。二に、現今のごとき情勢下においては、個体生命はその様態と運命に関して、総じて独自性と自律性を失うのほかにないものだろうか。逆に言えば、個体生命は国家的全体や階級

的総体の圧力に対して、自己の権威と個有の規範とを主張しえぬほどに他律的なものであろうか。三に、現代のごとき事情の下では、個体生命なるものはかくも微弱であり、かくも他律的であるのほかにないとするれば、国家的全体や階級的総体はいったい何ものを自己進展の発条となし、何ものを自己活動の目標としているのであろうか。換言すれば、国家や階級は、そこに一種の空転事象を見出すことによって、慄然、虚無の想いをなさないであろうか。[改行]以上の疑問はことごとく、現代における個体生命の価値如何を問うものと言ってよからう。即ち、一に社会的全体に対する能動性の側面から、二に社会的全体からの自由と独自性の側面から、三に社会的全体における内容性ともいべき側面から、それぞれ個体生命の価値を問おうとするものである⁽²⁷⁾。

こうした「個」観は、個別的存在としての「個」の尊厳への注視が前提されていた。こうした「個」の内在的な力の存在を想定して、外界との関係性が構想された。そのイメージは、第8期にいたるまで一貫して維持されていった。しかも、第8期に到達した「死に接しつつ生きる人間」という見地から改めて「構造的、具体的に」「個体生命の価値」への関心が強められていった。

4.3 権威からの解放の発想

以上に述べたような「共同体」に対する三重の否定を介した「地域 個」観の変革の過程は、一面では「共同体」相対化の過程であり、他面では、「近代」相対化の過程であった。しかもその際の相対化(検証・変革)の判断基準は、第8期以後については、「死者」との対話から導かれるものであった。そこには、既述したような「死に接して生きる人間」という「個」観が存在している。

このことを「個」の意識変革の相に即してみた場合、上原のたたかいは二つの意味において「宗教批判のたたかい」であると考えられる。一つは、古い「共同体」を正当化する因習・教義への批判である。もう一つは、「個」(「個体生命」の尊厳と認識能力)の外側から先験的に与えられる場合の「近代知」(「近代」を無批判に正当化する)に対して批判的見地から検証を加え、その真偽を見極める批判精神である。上原が想定する「個」にとっては、私的経験による検証を経ないで無批判に与えられる「近代知」は、古い「共同体」を正当化してきた因習・教義と同様に宗教的機能をもつと考えられたからである。

上原の宗教批判は、二つの段階が想定されていた。一つは、日本仏教を含む日本の宗教が、政治に従属する形での政治性ではなく、宗教の立場を堅持しつつ実際生活問題の解決を視野にいたした生活性、実践性を志向するよう、強く要請する論⁽²⁸⁾であった。この意味での宗教批

判は、第4期から継続されていた。もう一つの宗教批判は、もう一段深い次元からの立論である。それは、宗教という形をもつか否かは別として、これまで「宗教という形で保存されてきた人間の能力をつきとめる」ことへの着眼である。この点については、上原本人ではなく、福田定良による『死者・生者 - 日蓮認識への発想と視点 - 』（未来社、1974年）に対する書評（「宗教批判の手がかりとして - 上原専祿『死者・生者』(『朝日ジャーナル』1974年7月26日号)に掲載」)に注目する。福田は、次のように述べた。

「[前略]このごろになって、やっと、知識人の仕事に宗教批判というものが欠けていることに気づいた。私が宗教について語る知識人にうさんくささを感じてきたのも、もしかすると、彼らが宗教批判といういちばん根本的な作業をおこなっていることを本能的に感じとったからかもしれない。[改行]むしろ、宗教の非科学性を指摘する『宗教批判』なら、いくらでもある。だが、ここで宗教批判というのは、これまで宗教という形で保存されてきた人間の能力をつきとめるということである。既成の宗教(教団)を認めるかどうかはそのあとの作業であって、認めないとすれば、その人間の能力を発揮することができるような新しい形を示さなければならない。その人間の能力が発揮されるものなら、宗教でなくてもさしつかえない。無神論とは、ほんらい、そういうものであって、単なる理論や教養ではないはずである」[傍点は引用者]⁽²⁹⁾

ここでいう「これまで宗教という形で保存されてきた人間の能力」について福田は、その能力は「いろいろな機会に発揮される」と述べ、具体的には次のような事例をあげている。

「信仰によって死をのりこえることができるという思想はまだほろびてはいないだろう」⁽³⁰⁾

「上原専祿氏の『死者・生者』(1800円、未来社)によれば、死者との人間関係を生活のなかでもちつづけてゆくの宗教という形で保存されてきた人間の能力であるように見える。仏教徒の間で回向と呼ばれているものはその具体的なあらわれであり、死者と生者との『コミュニケーションの唯一の方法』である」⁽³¹⁾

この福田の書評は、「宗教という形で保存されてきた」個々の人間の能力の内容を見きわめることにより、宗教の個別教義やイデオロギーを取り去った後に残る実在的な力を確認するという、宗教批判の核心を鋭くついで上原理解の一端を述べている点で、深い次元からの見方である、と考えられる。

ここで指摘される「宗教という形で保存されてきた人間の能力」には、死生観のみならず、自然との接し方や厳しい生活現実の苦境をのりこえる指針の獲得方法等も含まれる。それらには、人間の生存を左右する基本的な

世界観や処方箋が多く含まれている。他方では、それらの中には封建的共同体の規制を正当化する方向に機能してきた旧習も含まれるであろう。福田氏の指摘に沿うならば、第8期以後の上原「主体性」論は、「死に接して生きる人間」という「個」観を基盤にした「死者との対話」を起点とした価値観に基づき、これらの可能性と限界を弁別する認識論上の見地を示したということになると理解される。このように理解する理由は、このように人間能力という現世に実在するものを吟味することを通して、既成の宗教(知)を私的経験に照らして検証する見地(=既述の「共同体」相対化)を確保すると同時に、生活現実の解決に寄与できる「知」を創造する(=日本の各地域の生活から乖離した場合の「近代科学の体系知」の相対化による)こと、しかもその認識を左右する価値観が「死者との対話」から導かれることは、既述してきた上原理論の特質と符合するからである⁽³²⁾。

以上のことを受けてさらに論を進めれば、上原にとって宗教という形態をもつと否とを問わず、「死に接して生きる人間」という「個」の見地からみて、生存し、生活し、「地域」をつくり変えていく上で有効性をもつ、世俗界の人間能力をみきわめることが最大の関心事であった。上原が構想した「個」とは、こうした意味での宗教批判の見地から「共同体」を相対化し続ける営みの中に生成するものであった。

以上に述べてきたことを総括すれば、上原は、4.1.1.でみた「共同体」に対する三重の否定を介して、第8期になって「死者のメディア」としての「個」観を確立させることによって、「個」が「地域」における個人志向・集団志向の動的緊張力学の中で変革され、「世界史像の五項目」との重層的存在感を獲得することによって、既成の宗教的権威や学問的権威から脱却し、解放されていく可能性を展望した。

5. まとめ

以上に述べてきたことの本来的な要点をまとめると、次のように集約される。

- 1 上原専祿の「主体性形成と学習」論に関わる「地域 個」観は、戦後、変容してきた。その変容は、およそ本文「2」でとりあげたような五つの提起に節節化される。
- 2 上原は、第8期に至って「死者・生者」論に到達した。その境地からそれまでの「地域 個」観を再構成した場合、「生活現実の歴史的認識」論や「個人・地域・国・地域世界・全地球的世界の動的、構造的、具体的な世界史像」は、深化した形で継承された。
- 3 ただし、認識の起点である価値観を規定する判断基準は、「死に接しつつ生きる人間」観を含む「死者・

生者」関係（「近代」の矛盾）から導き出されることになったため、およそ以下の3点が変化した。

- 4 一つは、複合的「世界史像」の認識軸は、一神教の神観念（神と個との対話）のイメージから決別し、「生者」の主観内における「審判者である死者」との対話から生み出される価値観に基づいて構成されるように変容した。
- 5 二つには、前記した価値観に照らして、古い「共同体」とそれを正当化する因習・教義が検証・変革され、新しいエートスを形成し、その中から新しい世代が成長するという「共同体」相対化の循環構造（＝「地域共同性」の不断の変革）が構想された。
- 6 三つには、前記の循環構造には、個人志向と集団志向の同時進行が想定されている。その動力は、個人志向と集団志向との動態性を生み出す、上原固有の緊張力学である。この力学が発動することによって、「世界史像」における「個人・地域・国・地域世界・全地球的世界の五項目」の存在すべては、いずれか一局に固定化されない複合的で重層的な現れ（いわば「越境的存在」）となることが可能とされる。
- 7 こうした「地域 個」観を「個」に焦点化してみた場合、上原の「個」観は、本文「4.1.」でみた「共同体」に対する「三重の否定」を介して、古い「共同体」残滓からの離陸が果たされていった。その「個」は、常に「個」内部の尊厳・主張を維持しつつも、「地域」及び「民族」及び「人類世界」等の外界頂との関係で（＝既述の緊張力学の中で）刺激を受け、変革されていく相の下でとらえられる。
- 8 以上のような「地域 個」観に照らした「共同体」相対化の過程は、「近代」相対化と表裏のものである。ただし、上原が想定する「個」にとって、先験的に与えられる「近代知」が無批判に受け入れられる傾向（「近代」自体とは異質のもの）については、古い「共同体」を正当化する因習・教義と同様に宗教的機能を帯びる。このため、こうした傾向への批判は、本質上「共同体」相対化である。
- 9 上原にとって宗教という形態をもつと否とを問わず、「死に接して生きる人間」という「個」の見地からみて、生存し、生活し、「地域」をつくり変えていく上で実践的検証に耐えて有効性をもつ、世俗界の人間能力をみきわめることが最大の関心事であった。上原が構想した「個」とは、こうした意味での宗教批判の見地から「共同体」を相対化し続ける営みの中に形成されるものであった。
- 10 以上を総括すれば、上原は、「共同体」に対する三重の否定を介して、第8期になって「死者のメディア」としての「個」観を確立させることによって、「個」が「地域」における個人志向・集団志向の動態的緊張

力学の中で変革され、「世界史像の五項目」との重層的存在感を獲得することによって、既成の宗教的権威や学問的権威から脱却し、解放されていく可能性を展望した。

以上に集約した上原の「個」観は、日本の教育実践史（記録）の中に「地域の中から生成する内発的な学習のエネルギー」を分析する際に不可欠な視点と方法を提供していると考えられる。その理由は、日本社会における「共同体」の残滓の中に内包された「個」の変革の契機と可能性、その「認識（自己認識）上のリアリティ」、「地域」内における個人志向と集団志向の動態力学とその人間形成機能、「地域」現実の中に顕在・潜在する「死に接しつつ生きる人間」状況認識とそれからの価値観設定、その価値観を軸にした世界（史）的認識の方法、「複合的重層的な世界（史）像」による「越境的存在」認識は、教育実践の中に、個人内発的で「地域」内発的な学習のエネルギーの発現をとらえ、分析する上で実際的な有効性をもつと考えられるからである。

注・文献等

[注]* 上原弘江編『上原専祿著作集』（評論社）について、以下、『著作集』と記す。

- (1) 片岡弘勝「上原専祿「主体性形成と学習」論研究（その3）「地域」概念の動態性とその変容」、日本社会教育学会第53回研究大会自由研究発表資料（2006年9月9日、会場＝福島大学）。
- (2) 片岡弘勝「上原専祿「主体性形成と学習」論研究（その4）「地域」概念のモデル化の試み」、日本社会教育学会第54回研究大会自由研究発表資料（2007年9月9日、会場＝東京農工大学）。同発表資料稿を加筆修正した論文を片岡弘勝「主体的学習の環境条件としての『地域』概念 実践分析のためのモデル設計」、『奈良教育大学紀要』第57巻第1号（人文・社会科学）2008年）として発表した。
- (3) 片岡弘勝「上原専祿『主体性形成』論における『近代』相対化方法 生涯にわたる時期区分とその指標」、『奈良教育大学紀要第54巻第1号（人文・社会）』2005年、pp.17-32。
- (4) 片岡弘勝「上原専祿『主体性形成』論における価値づけ方法 <抽象的肯定> から <具体的否定> への変容」、『日本社会教育学会紀要 42』日本社会教育学会、2006年、pp.35-44。
- (5) 『著作集15 歴史的省察の新対象 新版』（1990年）の「あとがき」、p.210。
- (6) 上原「歴史的省察の新対象」（初出1946年）後、前掲『著作集15 歴史的省察の新対象 新版』の収載、pp.13-31。
- (7) 上原と宗像誠也『日本人の創造 教育対話篇』（東洋書館、1952年）での上原発言、pp.118-119。
- (8) 同前書での上原発言、p.159。
- (9) 同前書での上原発言、pp.127-141。
- (10) 例えば、上原は、次のように発言していた。「われわれ日本人の精神特徴のなかにも、不合理なものを合理化し、小さい自己を大きい自己に高めていき、また、一応の形をもっていたものを突き破ることによって更に新しい形をつくり出

- していく、そういうことのために、ばねになり契機になるような要素が含まれていたと思う。』[傍点は原文](同前書での上原発言、p.139。)
- (11) 上原「国民教育確立のために」、『国民教育研究所年報1959年度』1960年、国民教育研究所編集『民研20年のあゆみ』(労働旬報社、1977年)に掲載、そのp.58。
- (12) 上原「地域研究の意味と方法」(1963年3月第7回六県共同研究会「経済・産業と教育」分科会での報告、『著作集19 世界史論考』p.319。
- (13) 上原「世界史の起点 世界史概念を明確化するために」(1968年～)、同稿は未発表稿であったが、『著作集25 世界史認識の新課題』(1987年)の収録、pp.537-547。
- (14) この点については、片岡弘勝「戦後成人学習内容論における『地域』概念 上原専祿『地域 日本 世界の統一的把握』論の方法意識」、『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告 第3号』(1998年)で論述した。
- (15) こうした「死者・生者」論は、上原『死者・生者 日蓮認識への発想と視点』(未来社、1974年)で公表された。第8期に至って到達した上原の「死者・生者」関係の主体性論は、「近代」を相対化する発想論理やそのための言葉を、同じ「近代」が生み出した言葉ではなく、「近代」による犠牲者の言葉、すなわち「近代」が生み出す矛盾構造の中から導き出す境地に到達したのである。この点については、前掲注3)の片岡論文で論述した。
- (16) 上原「本を読む・切手を読む」、『著作集17 クレタの壺 世界史像形成への試読』(1993年) p.297。
- (17) 前掲注2)の片岡弘勝「主体的学習の環境条件としての『地域』概念 実践分析のためのモデル設計」。
- (18) 上原「現代認識の問題性」(初出1963年) 前掲『著作集25 世界史認識の新課題』に収録。
- (19) この点については、片岡弘勝「戦後主体形成論における『地域』概念 上原専祿『生活現実の歴史化的認識』論の構造」、『日本社会教育学会紀要 34』(日本社会教育学会、1998年)で論述した。
- (20) 上原「死者が裁く」(初出1970年)、『著作集16 死者・生者 日蓮認識への発想と視点』1988年、pp.42-45。
- (21) 前掲『著作集15 歴史的省察の新対象 新版』の「あとがき」p.215。
- (22) 前掲、上原「現代認識の問題性」。
- (23) 前掲、注2)の片岡「主体的学習の環境条件としての『地域』概念 実践分析のためのモデル設計」。
- (24) 前掲『著作集15 歴史的省察の新対象 新版』。
- (25) 例えば、『著作集13 増補改訂版 世界史における現代のアジア』(1991年)。
- (26) 例えば、マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(原著1905年。大塚久雄による日本語訳は1989年に岩波書店より発行(岩波文庫版))。
- (27) 上原「個体生命の価値」(初出1947年) 前掲『著作集15 歴史的省察の新対象 新版』pp.78-79。
- (28) こうした論は、『著作集26 経王・列聖・大聖 世界史的現実と日本仏教』(1987年)に収録。
- (29) 福田定良「宗教批判の手がかりとして - 上原専祿『死者・生者』」(『朝日ジャーナル』1974年7月26日号)に掲載、後、評論社の『上原専祿著作集通信2』(1988年10月28日)に収録、p.2。
- (30) 福田、同前。
- (31) 福田、前掲「宗教批判の手がかりとして - 上原専祿『死者・生者』」、評論社の前掲『上原専祿著作集通信2』p.3。
- (32) 福田氏の同書評が上原理論の深い理解を示していると考えられる一つの参考になることとして次の事実を指摘しておきたい。遺族であり、『上原専祿著作集』の編者である上原弘江氏によれば、『朝日ジャーナル』に掲載された同書評を読んだ上原専祿は、1974年7月20日福田氏に直接に電話している。このことについて上原弘江氏は、「父は『上原専祿です』と名のり、『読みにくいものをよく読んで下さって……』とお礼を言っていた」と記し、「その日、七四年七月二日の日記に、父は次のように書いている。『朝日ジャーナル来る(七・二六日号)。福田定良氏が深い書評をしてくれていて、うれしかった。夜九時、市川市の福田氏に電話して、礼をいう。福田氏は一寸おどろいていた。』」と記している(上原弘江「福田さんと父」(評論社の前掲『上原専祿著作集通信2』p.1)に収録)。
- (本研究は、日本学術振興会2007～2008年度科学研究費補助金を受けて行った研究(基盤研究(C))「日本の地域概念と主体的課題化学習との運動に関する理論的実証的研究」(2007～2008年度・課題番号19530698・研究代表者=片岡弘勝)の成果の一部である。)